

腹が立つ 腹が立つ

柿の種至上主義

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

勢いで書いた。

反省も後悔もしていない。

続くかどうかは誰にも分からない。

# 目次

オリジン

1



# オリジン

大好きだった母が最期まで愛していた相手は、何千何万と殺しても足りない程憎い男だった。

もう何年も前のことのはずなのに、今でもついさっきの出来事のように鮮明におぼえている。

病院のベッドに力なく横たわる母に、隣の妹は励ましを投げかけている。

『おかーさん大丈夫よ！』

幼いながらにそれが嘘だと分かっていたはずなのに

『おとーさんすぐ帰ってくるから！だから大丈夫よ！』

残していくことになる俺たちに、生気の無い顔で精一杯笑顔を作ろうとしてくれた母



——だから死に物狂いで気配や印象操作の技術を学んだ

年を追うごとにアレに近くなることを感じ、そのたびに新たな技術を死に物狂いでおぼえた。

ただどここの顔だけはどうしようもなかった。声をかえ、雰囲気をかえても、どんな技術をおぼえてもどうしようもないこの顔だけはかえることができなかった。

辛い思い出を想起させるこの顔のせいで妹たちと離れ離れで暮らすようになっても、アレが関わったことに否応なしに巻き込まれても、大好きだった母さんがくれた顔が、大好きだった母さんが愛してくれた息子の顔は、変えられなかった……

いつそアレに見立てて怒りをぶつけてくれれば、煮るなり焼くなりしてくれれば、この顔に未練などなかったというのに……

『景、それに改、ごめんね』

最期の母さんの顔は美しかった。これからも一生忘れることはないだろう。残していく子どもたちへの申し訳なさと、俺を見て一抹の寂しさを宿したあの顔は。

『お父さんを許してあげてね』

目が覚める

変わり映えのしない、いつも通りの夢と視界にうつる天井。

いつも通り体を起こし、洗面台に向かう。

顔を洗い終えて、目の前に見えた顔に反射的に体が動いた。

「…ははッ、またやってしまった」

まだ若干寝ぼけた思考の中で、拳に刺さったガラス片を取り除いていく。



ああ

腹が立つ

腹が立つ